

宇都宮共和大学まちまちサークルの 設立までの経緯と 2024 年度の活動内容的研究

Background to the establishment of the Utsunomiya Kyowa University
“Machimachi Circle” and its activities in FY2024

坂 口 豪（宇都宮共和大学 専任講師）

本報告では、2024 年 4 月に宇都宮共和大学シティライフ学部設立された「まちまちサークル」が設立されるまでの経緯と、2024 年度の活動内容を記述した。宇都宮市内でのまちづくり活動を主たる目的とした「まちづくりサークル」と栃木県内のさまざまな地域でまち歩きを行うことを目的とした「まちあるきサークル」が同キャンパス内に併存していた。さらに「まちづくりサークル」のメンバーは全員「まちあるきサークル」に所属していたことから 2 つのサークルを合併して、まちまちサークルが設立された。2024 年度は前身の 2 つのサークル活動の取り組みを引き継ぎつつ、サークルとして宇都宮市のまちづくり提案発表会で発表を行い、第 2 位の結果を残した。

1 本報告の背景と目的

本報告では、「宇都宮共和大学まちまちサークル（以下、まちまちサークル）」が結成されるまでの経緯や所属する学生のサークル活動への思い、および活動内容について論じる。宇都宮共和大学は栃木県宇都宮市に位置する私立大学であり、シティライフ学部と子ども生活学部の 2 学部から構成されている。まちまちサークルは宇都宮市の中心部に近いシティライフ学部設置されているサークルである。まちまちサークルは、「まちあるき」と「まちづくり活動」の 2 つを活動の柱としている。

大学生による「まちあるき」や「まちづくり活動」については、多くの先行研究がみられる。羽田野（2014）では福井大学教育地域科学部地域科学課程に在籍する学生で構成されている「福井大学 EMP 実行委員会」を事例に取り上げて、団体の発足のきっかけ、所属する学生の属性、活動内容などが詳細に記述されている。さらに結論として「地域活動の機会提供は彼らの将来展望とそれへ向けた行動に概ねポジティブな変化をもたらしており、地域活動の参加経験がない若者に、何らかの形で地域活動参加の機会を提供することが、若者の地域活動参加および地域への関心を高める上で確実に効果をもたらす」ことを示していた（羽田野 2014）。

内藤（2016）では、ゼミ活動において学生たちとキャンパスが位置する地域で行われていた菊水祭山車を復興させることで、大工町・寺町周辺のかつての賑わいを取り戻すための活動を行ったことを詳細に記述している。内藤（2016）では、宇都宮共和大学シティライフ学部の内藤ゼミを含む複数のゼミ・サークルに所属する大学生約 20 名と、宇都宮市東地区連合自治会所属 25 自治会約 2500 世帯の住民の方々、宇都宮市内のその他協力団体から組織された「宇都宮まちづくりお助け隊」の結成と、その団体の目的である大工町の菊水祭山車の復興について論じていた。

このように大学生によるまちづくり活動に関する論考は多くみられるものの、地方都市に位置する小規模な私立大学の学生が活動主体となっているサークル活動での事例はほとんどみられない。そこで本報告では、まちまちサークルが結成されるまでの経緯、所属学生の属性やサークル活動への思い、および 2024 年度を中心とした活動内容に焦点をあてて記述をしていく。

調査の方法としては、サークルに所属する学生への聞き取りにより「まちまちサークルが結成されるまでの経緯、および所属学生のサークル活動の思い」を明らかにした。中心となる聞き取り対象は 2 人の学生である。一人は、まちまちサークルの前身の 1 つのサークルであった「まちづくりサークル」の代表であった 4 年生の学生 F である。もう一人は、まちまちサークルの前身のサークルであった「まちあるきサークル」の元代表で現在の「まちまちサークル」代表である学生 Y である。さらに筆者はまちまちサークルの顧問として学生たちと関わりを持つことができた。顧問として活動に関与する中で見聞きしたことに基づいて 2024 年度の活動内容を記述するに至った。そのため若干、筆者の主観によった記述がみられることを容赦いただきたい。

2 まちまちサークルに所属する学生

本論に入る前に、2024 年度のまちまちサークルに所属する主要な学生を説明する（表 1）。こ

表 1 2024 年度のまちまちサークルの主な部員一覧

学年	仮称	性別	役職	合併前の所属サークル
4年生	学生F	男子		まちづくりサークル（町おこしTiger）元代表 とちぎまちあるきサークル
	学生T	男子		まちづくりサークル（町おこしTiger） とちぎまちあるきサークル
	学生M	女子		とちぎまるあるきサークル
3年生		男子		とちぎまるあるきサークル
2年生	学生Y	男子	部長	とちぎまるあるきサークル
	学生U	男子		
	学生K	男子	会計	
		女子	副部長	とちぎまるあるきサークル
		女子		まちづくりサークル
		女子		とちぎまるあるきサークル
1年生		男子		
		女子		

れまでまちまちサークルや前身となるサークルで活動に参加した主要な学生を一覧にまとめた。学年の表記を 2024 年度当時である。第 3 章では、主に 4 年生の学生 F と 2 年生の学生 Y への聞き取りに基づき記述した。男女比は男子学生 7 人、女子学生 5 人である。まちまちサークルの幹部学生は 2 年生の 3 人の学生が務めていた。また 2 年生以上の多くの学生は、第 3 章で詳述するまちまちサークルの前身となる 2 つのサークルのどちらか（一部は両方）に所属していた。

3 まちまちサークルが結成されるまで

3.1 町おこし Tiger からまちづくりサークルへ

学生 F は 2021 年に宇都宮共和大学シティライフ学部に入學した。学生 F は高校時代に「烏山学」という地域学を学校教育の中で目の当たりにし、地域活動やまちづくりに関心をもつきっかけとなった。また、学生 F が宇都宮共和大学のオープンキャンパスに参加した際に、当時まちづくり分野の教員として所属していた教員 N と個人面談をした際の話に感銘を受け、教員 N のゼミに入りたいと思うようになり、宇都宮共和大学を進学先に選択することとなった。

学生 F が 2021 年に宇都宮共和大学シティライフ学部に入學すると、教員 N が担当する講義をさっそく履修し、「オープンキャンパスで N 先生とお話したことがきっかけで N 先生のゼミに入りたいと思うようになり入學しました」と教員 N に直接伝えた。ところが教員 N は学生 F のことを覚えていなかったという後日談があったが、そこから学生 F は教員 N の指導を仰ぐようになり、創造都市研究センターのアントレプレナー研究会や地域社会実習などを通じて、地域とのつながりを強くしていった。

学生 F の大学入學後から 1 年が経とうとしていた 2022 年 2 月に教員 N から「宇都宮空襲」に関するイベントを行うことの提案を受けた。教員 N は 2021 年 10 月に幸い橋下にて宇都宮空襲に関する映画上映イベントに携わり、その中で宇都宮市内において平和活動を行う人びととの関係を強めていた。一方で、平和活動を行う人びとも高齢化が進み、教員 N はそうした人たちから若い人に活動を引き継いでいきたいと相談されていた。そうした経緯から、まちづくりや地域活動に関心が強かった学生 F に平和活動に関するイベントを企画する提案を行った。

学生 F は宇都宮で平和活動などを行う団体である「ピースうつのみや」の方々と会い、関係を構築することとなった。さらに学生 F は地域に根ざした平和活動を行いたいと考え、同じ学年で親しかった学生 T とともに相談し、一緒にサークルを立ち上げる方向性が定まった。その後、学生 F が 2 年生となった 2022 年 4 月に「町おこし Tiger」という名称のサークルを立ち上げた。町おこし Tiger という名称は「宇都宮空襲」や「平和活動」だけでなく、広く宇都宮駅西口エリアの町おこしをしていきたい思いが込められている。2022 年 7 月には、町おこし Tiger として初となるイベント「灯ろうづくり体験教室」と「宵まち宮灯ろう」が実施された。この 2 つのイベントの実施にあたっては前述した「ピースうつのみや」や宇都宮駅西口周辺の方々、および教員の協力のもと実現することができた。中心となって動いた学生は学生 F と学生 T の他に 2 名の協力

表2 まちまちサークルの前身サークルの合併までの活動内容

2022年	2月	学生Fが教員Nから宇都宮空襲の関するイベントを行うことの提案を受ける 「ピースうつのみや」の方々と会う
	3月	先生方との相談のもと学生の組織を作る方向に 同期のTさんに相談しサークルを作ることになる
	4月	サークル「町おこしTiger」を立ち上げ 「空襲」に関わらず、西口周辺の町おこしのため上記名称に
	7月	サークル初のイベント「灯ろうづくり体験教室」や「宵まち宮灯ろう」を実施 一市民団体「ピースうつのみや」や西口周辺の方々、先生方の協力のもと サークル実行学生2名、協力学生2名
	10月	すみれ祭にて「灯ろうづくり体験教室」のことなどを展示
2023年	2月	「宵まち宮灯ろう」2回目に向けて企画・準備へ
	3月	サークル名を「まちづくりサークル」に変更 新入生などを受け入れやすい名称に。所属学生6名だが、実行学生は2名
	4月	サークル紹介にて3名の新入生が新たに所属。実行学生5名に。※2名は外部協力者の扱い
	7月	2回目の「灯ろうづくり体験教室」や「宵まち宮灯ろう」を実施 一市民団体「ピースうつのみや」や西口周辺の方々、先生方の協力のもと
	9月	学生Yなどが「とちぎまちあるきサークル」を立ち上げ とちぎまちあるきサークルでさくら市喜連川での秋祭りに参加
	10月	昨年と同様にすみれ祭にてサークルの展示を行う
	11月	「まちづくりサークル」の学生1人と「まちあるきサークル」の学生2人が統合を協議
2024年	12月	まちづくりサークル代表Fも話し合いに加わり、サークル統合を決定 統合事由①両サークルのメンバーのダブリ ②互いのサークルが単体で運営するには今後限界がある懸念 ③もっと地域貢献や地域で活動するのは大きな組織が必要ではないか（学生F）
	2月	まちづくりサークルの総会でサークル統合を通知 とちぎまちあるきサークル最後のまち歩きを実施

学生がいた。

2022年10月には宇都宮共和大学の宇都宮シティキャンパスで行われた大学祭「すみれ祭」において学生たちが中心となりサークル展示を行った。展示内容は「灯ろうづくり体験教室」と「宵まち宮灯ろう」のイベントの内容を中心としたものであった。

2023年3月には新年度から入学する新入生の受け入れ準備が始められた。その過程で、学生Fは新入生に活動内容などがより分かりやすいサークル名にする必要があると考え、町おこしTigerから「まちづくりサークル」へと名称を変更した。

2023年4月になり学生Fは3年生となった。サークル紹介を経て、女子学生1名が入部した。昨年と同じく2023年7月に2回目の「灯ろう作り体験教室」と「宵まち宮灯ろう」を実施した。平和活動については、前述の2つのイベントのほか「宇都宮市平和のつどい」にまちづくりサークルのメンバー1名が参加をした。10月にはすみれ祭にて昨年と同様に平和活動イベントに関する展示を行った。

2023年11月頃からは後述するまちあるきサークルと合併する話が持ち上がり、12月からはまちづくりサークルの代表でもある学生Fも議論に加わり、サークル統合を決定した。

3.2 とちぎまちあるきサークルの活動内容とその参加学生

とちぎまちあるきサークルは2024年度に2年生である学生Yが代表として立ち上げたサークルである。主に学生Yへの聞き取りに基づいてとちぎまちあるきサークルの活動を記述する。学生Yは2023年4月に宇都宮共和大学シティライフ学部に入學した。当初はまちづくりやまち歩きに強い関心があったわけではなく、4月当初からサークルに加入するということもなかった。先輩からの誘いで6月に「とちぎ地域づくりフェア」に参加したことを契機にまちづくりやまち歩きに関心を持つようになった。さらに2023年当時の4年生と3年生（学生M）であった二人の女子学生の先輩がさくら市喜連川でまち歩きイベントを企画し、それに参加したこと、さらに喜連川での秋祭りに参加したこともまちづくりへの関心を強めた。また、宇都宮駅西口ではペDESTリアンデッキを活用した通称「ペデフェス」が2023年8月に行われた。学生Yはそのお手伝いの学生としても運営に関わっていた。

前述した喜連川でのまち歩きの経験とペデフェスへの関与を経て、2023年9月に学生Yは自らが代表として「とちぎまちあるきサークル」を設立した。「町おこし Tiger」が宇都宮市内を中心にまちづくり活動を行うことを設立されたのに対して、「とちぎまちあるきサークル」は栃木県内全域を対象にまち歩きを行うことを目的としている。サークル所属学生には、まちづくりサークルを立ち上げた学生Fと学生Tも加入していた。2023年11月とちぎまちあるきサークルで初となるまち歩きイベントを日光市今市で行った。

3.3 まち歩きサークルとまちづくりサークルの合併によるまちまちサークルの結成

まちづくりサークルととちぎまちあるきサークルの両方に所属する学生Tと、とちぎまちあるきサークルの代表である学生Yと学生Hの3名でサークルを統合する議論を始め、前述した通り、12月からはまちづくりサークル代業の学生Fも含めた話し合いを行った。サークル統合の理由としては、両サークルのメンバーの重なりや、互いのサークルが単体で運営するには今後限界があると感じたこと、さらに「地域貢献」や「地域活動」を広げていくにあたっては大きな組織が必要であるといった考えから統合に至った。2024年4月の新歓の時期に合わせて、「まちづくり」と「まち歩き」を活動の柱とすることから頭文字をとって「まちまちサークル」として宇都宮共和大学シティライフ学部にはサークル登録を行い、まちまちサークルとしての活動が始まった。

4 2024年度のまちまちサークルの活動

4.1 まちまちサークルの活動内容

まちまちサークルは、所属メンバーそれぞれが地域におけるイベント企画や運営に携わっていることが多い。学生Fは平和活動イベントだけでなく、さまざまな地域イベントも含めて活動を行ってきた。2024年4月には学生Fが実行委員長を務めた「宮桜祭」が開催された。宮桜祭は2022年から行われているJR宇都宮駅西口に流れる田川の宮の橋付近の川沿いの遊歩道を利用し

表3 まちまちサークルの2024年度の活動内容

4月	サークル新歓	・男子学生1名（1年生）入部 ・まちづくり提案発表会へ出場を議論
	宮桜祭	・主催は宮桜祭実行委員会 委員長を学生Aが務めた
5月		・女子学生1名（1年生）入部
6月	みんな田川でバーベQ！	・主催は学生団体「みやガク」 まちまちサークル所属学生の一部が運営
7月	灯ろうづくり体験教室	・まちまちサークルから7名 その他協力学生2名
	宇都宮市主催「大学生による まちづくり提案」申込書提出	・まちまちサークル所属の2年生 学生B、C、Dの3名で提案に参加
9月	宇都宮市主催「大学生による まちづくり提案」中間報告会	・まちまちサークル3名が市の担当者へ オンラインで中間報告を実施
10月	平和教育活動「歴史に刻まれた夜 今こそ、宇都宮空襲を忘れない！」	・学生Aが宵まち宮灯ろうの代わりとなる 「平和学習ツアー」を実施。宇都宮空襲に関 連する市内スポットを巡った
	宇都宮共和大学シティライフ学部 大学祭「すみれ祭」にて展示	・1年生を中心に灯ろうづくり体験教室の イベント紹介などの展示を行った
12月	宇都宮市主催「大学生による まちづくり提案」発表会	・宇都宮市役所にてプレゼンテーション （口頭発表）とポスター発表を実施 ・13団体中第2位として表彰
1月	宇都宮市長との意見交換会へ参加	・まちづくり提案における上位入賞 グループとして市長との意見交換を実施
3月	サークル内イベント 「佐野まち歩き」を実施	・2024年度初めてとなるサークル内での まち歩きを佐野市で実施した

たイベントである。主催は「宮桜祭実行委員会」で、例年、宇都宮共和大学シティライフ学部の学生が委員長を務めてきた。2024年は学生Fを中心にまちまちサークルのメンバーが音楽ステージの準備・運営や飲食店での販売を行った。

6月には宇都宮共和大学シティライフ学部の学生有志で構成される学生団体「みやガク」が「みんな田川でバーベQ！」を開催した。第1部は宇都宮市若者まちなか活動・交流センターにおいて同センターを活用した地域交流の促進を考えるワークショップを行った。第2部にはJR宇都宮駅西口を流れる田川の宮の橋付近に移動し、まず参加者全員でゴミ拾いを中心とした清掃活動を実施した。その後、参加者同士の交流を深めるため田川沿いの遊歩道脇の緑地にてバーベキューを行った。地域の方や大学関係者合わせて50名ほど参加し、地域と大学の良い交流の機会となった。主催は「みやガク」であるが、みやガクの全メンバーはまちまちサークルに所属しており、みやガク以外の学生運営スタッフもまちまちサークル所属の学生が担っていたため、みやガクと

まちまちサークルが共催する形で実施されたイベントであるとみなすことができる。

7月の活動としては学生Fが2022年から続けてきた灯ろうづくり体験教室を開催した。まちまちサークルから7名が活動に参加し、サークルメンバー以外から2名の宇都宮共和大学シティライフ学部の学生が協力した。4年生であった学生Fのほかは大多数が2年生の学生であり、イベント運営の引き継ぎとしても良いメンバー構成であったと考えられる。

10月には、学生Fが卒業研究でも取り組んでいる宇都宮空襲を中心とした平和学習に関するイベントを開催した。「歴史に刻まれた夜今こそ、宇都宮空襲を忘れない！」と題して、宇都宮空襲に関する平和学習を主に中学・高校生向けに開催した。宇都宮市若者まちなか活動・交流センターを会場に本イベントは実施された。第1部としては、宇都宮共和大学の子ども生活学部の学生による宇都宮空襲に関する紙芝居の読み聞かせが行われた。その後の第2部としては、実際に宇都宮空襲に関する戦災遺構などを歩いて巡るツアーが実施された。ツアーでは、宇都宮二荒山神社においては神職の方から直接境内を案内いただき、神社の歴史などにも触れることができた。また、学生Fの案内で宇都宮空襲と宇都宮二荒山神社の関係も解説された。ツアーでは、宇都宮市立中央小学校や旭町の大いちょう、宇都宮城址公園などを巡り、学生Fが各々のスポットで解説を行った。雨が降る悪条件のなかでのツアーの開催となったが、参加者は熱心に解説を聞いている様子であった。

10月下旬の宇都宮共和大学宇都宮シティキャンパスで実施された「すみれ祭」では1年生が中心となり、7月の灯ろうづくり体験教室に関する展示を行った。

10月以降は後述する宇都宮市まちづくり提案発表会に向けた準備によりまちまちサークル全体としての活動は少なくなった。2025年2月には宇都宮土木事務所が主催する形で「シダレザクラ復活祭2025」が開催された。宇都宮共和大学の学生9名と教員1名がシダレザクラの植樹に携わることができた。2025年3月にまちまちサークルとして初めてまち歩きのイベントを行った。このイベントはサークル内メンバーだけでのまち歩きであり、サークルメンバーの交流や地域を知ること重点をおいて行われた。



写真1 佐野まちあるきの様子



写真2 まちあるきで立ち寄った佐野厄除け大師

4.2 宇都宮市まちづくり提案発表へのまちまちサークルとしての参加と受賞

前述したとおり 2024 年のまちまちサークルの大きな出来事としては、2 年生であった学生 Y、U、K の 3 人が宇都宮市主催「大学生によるまちづくり提案 2024」（以下、まちづくり提案）で発表したことである。まちづくり提案は、宇都宮市内の学生が調査研究したテーマを宇都宮市の政策として提案するものである。2024 年度のまちづくり提案のテーマは「まちに広がる共創の輪～新たな価値の創造を目指して～」であった。まちづくり提案は 2024 年度で 20 回目を迎えた。宇都宮市内の大学から 13 団体が出場し、宇都宮共和大学からは 5 団体が参加した。以下にまちまちサークルがまちづくり提案に出場するまでの経緯と提案内容、および発表会での審査結果について詳述する。

2024 年 5 月頃に前述の 2 年生 3 人からサークルとしてまちづくり提案を出したいと相談があったことから始まる。通常、ゼミ単位でまちづくり提案に申請を出すことが多いが、学生 Y、U、K の 3 人を中心メンバーとしてまちづくり提案に挑戦したい思いが強く、ゼミから独立してまちまちサークルとして提案発表を行いたいのが 3 人の希望であった。まちまちサークルの顧問は、当初は教員 M が主担当であったが、教員 M は自身のゼミでまちづくり提案を出す流れとなっていた。そのため、副担当顧問のような立場でまちまちサークルに関わっていた筆者が、まちまちサークルとして申請するまちづくり提案の指導教員を引き受けることとなった。他方、サークルとしてまちづくり提案に申請するにあたっては、ゼミのように毎週決まった時間を提案準備の活動時間にあてられるわけではないので、基本的にはまちづくり提案に申請する 2 年生 3 人の自主的な活動として進めてもらい、指導教員はあくまでもサポート役というスタンスで関わった。

2024 年 7 月、学生 Y、学生 U、学生 K の 3 人はまちづくり提案の申請書をまとめ、宇都宮市へ提出した。テーマは、4 月に田川沿いで「宮桜祭」を、6 月に「みんな田川でバーベ Q！」を行ったことから、田川へフォーカスする方向性に決まった。さらに、2024 年度のまちづくり提案のテーマである「共創の輪」ということも考慮して「田川を起点としたにぎわい復興 ～FROM TAGAWA TO THE FUTURE～」を提案名として申請を行った。提案名には、かつては賑わいがみられた JR 宇都宮駅西口エリアのにぎわいが希薄化していることから、JR 宇都宮駅西口エリアを流れる田川の現代的な価値を創造し、かつて見せた西口エリアのにぎわいを復興させていきたい思いが込められた。さらに英字で表現された副題には「田川から始まり、未来につなげていく」という思いも乗せている。

2024 年 9 月にはまちづくり提案の中間発表があり、中間報告書を提出した上で、9 月下旬に中間報告会がオンラインにて行われた。4 月の宮桜祭と 6 月のみんな田川でバーベ Q！において田川での共創の輪をつくり出すイベントをすでに実践しており、その際の課題点なども報告できたため、市の担当者からも提案に向けた調査および実践に対して肯定的な意見が多くきかれた。

11 月から 12 月にかけていよいよ最終成果物の提出や発表会に向けた準備が本格化してきた。まず 11 月 22 日には提案書の提出が行われた。主に学生 U と学生 K が中心となり、報告書をまと

めあげた。さらに12月上旬には宇都宮共和大学宇都宮シティキャンパスで例年、クリスマスマーケットが開催されており、そのイベントの中でまちづくり提案の発表会も行われた。宇都宮共和大学から出場している5団体が発表を行った。クリスマスマーケットにおける発表はいわば12月23日の宇都宮市役所での発表会のプレ発表として位置づけることができ、学生にとっては本番に向けての良い動機付けとなった。クリスマスマーケットにおけるまちまちサークルの3人による発表のスライド資料は主に学生Uが作成した。原稿は主に学生Kが作成を担当した。12月23日の宇都宮市役所でのまちづくり提案発表会ではスライド資料を用いた口頭発表に加えて、ポスターによる発表も行われる。そのため、学生たちはクリスマスマーケットで使用したスライド資料をさらに改良し、発表会への資料を再構成し、その上でポスターの作成を行った。同時に、口頭発表にむけて発表原稿の改良も続けられた。

2024年12月23日、まちづくり提案発表会が行われた。会場は宇都宮市役所14階の大会議室であった。まちまちサークルの発表は3番目に行われた。提案発表内容の詳細は本冊子の特集ページおよび宇都宮市の「大学生によるまちづくり提案発表会」のWEBページを参照いただきたい。

まちまちサークルの提案は、審査の結果として13団体中で第2位を受賞することができた。評価された点としては、田川で実際に地域の方との共創によりイベントを2回も開催した上で、そこで得られた課題をソフト面とハード面の両面から提案に盛り込んだことである。とくに、田川でイベントをする際の行政手続きの煩雑さについては、土木事務所や警察への実際の申請書をポスターの前に設置してアピールし、田川にぎわい協議会の必要性を強調した。また、田川でにぎわいを創出するにあたって防災面にも配慮し、石碑型ハザードマップによる防災情報の発信も、そのアイデアのユニークさから評価の声がきかれた。

第2位を受賞したことを受けて、まちまちサークルの3人の発表者は宇都宮市長との意見交換会に参加することができた。2025年1月に行われた市長との意見交換会では、短縮版の提案発表を市長の前で行い、内容について市長と直接学生が懇談することができた。学生たちも市の政策にまちまちサークルの提案内容の一部でも反映されることを期待して意見交換会に臨んでいた。

5 これからのまちまちサークルの役割と地域活動へのつながり構築に向けて

まちまちサークルの活動は、宇都宮共和大学にとって重要な社会貢献活動の一端を担ってきた。まちまちサークルの前身の一つである「まちづくりサークル（町おこし Tiger）」が毎年実施してきた「灯ろうづくり体験教室」は平和活動を通じて地域の方々と大学生、および子どもたちがつながりをもてる機会を創出してきた。宮桜祭やみんな田川でバーベQ！といった学生が主体で企画・運営を行ったイベントも多く、地域の方々に参加をいただいた。県議会議員や市議会議員、あるいは自治会長など地域行政に深く関わる方々と大学生がグループワークで議論を深めることもできた。また、宮桜祭などで田川を起点としたまちづくり活動を積み重ねてきたことから、宇都宮土木事務所からまちまちサークルの代表学生に直接「シダレザクラ復活祭2025」への参

加依頼をいただくことができたと考えている。2022年の町おこし Tiger の設立から約3年の月日が経とうとしている中で、まちまちサークルのこれまでの活動が地域の中で認知されていることは、地域の方々と交流する中で感じられる。学生Fが地域の方と会うたびに「こんどいつイベント開催するの?」と聞かれると語る。そうした地域の方々の言動には、宇都宮共和大学やまちまちサークルがイベントを開催して地域を元気してくれるという期待の表れだと考えられる。

他方、大学生は4年で卒業をしてしまうので継続性の問題や、活動を引き継ぐ後輩学生のまちづくり活動へのモチベーションの違いなどの課題も表出している。まちまちサークルに所属する学生も、それぞれ特性があり学生Fのように自らイベントを企画・運営することを好んで活動する学生もいれば、自ら企画・運営をするのではなく他の地域団体が企画・運営するイベントをサポートすることで地域やまちづくり活動へ関与することを好む学生に分かれるのも事実である。地域からは、学生が主体となって推進するイベントを創出してもらいたい声が聞かれることもある一方で、これからサークルの中心となる2・3年生の世代は学生Fとは異なり、サポート役として地域イベントやまちづくり活動に携わりたい学生が多い傾向にある。そのため、教員としては学生にどのように向き合いまちづくり活動にいきなっていくかを考える必要がある。義務感で地域イベントを企画・運営をさせても結局途中で心が折れてしまい、まちづくり活動そのものに嫌悪感を抱かれてしまえば、まちづくりを学べることを大きく掲げている宇都宮共和大学シティライフ学部にとっても好ましいことではない。今後のまちまちサークルの活動は学生と教員とが相互にコミュニケーションを深めた上で、活動内容を熟慮していく段階であると考えている。

【参考文献・情報】

- [1] 羽田野慶子 (2014): 若者と地域活動 ―福井市における大学生のまちづくり活動の事例から―. 社会科学研究, No.65, 97-116.
- [2] 内藤英二 (2016): まちづくり活動の新展開～提案から実践へ 宇都宮まちづくりお助け隊の誕生～. 宇都宮共和大学 都市経済研究年報, No.16, 147-152.